

聖トマスに於ける esse の existere について (承前)

—existere の意味の探究・第三、語原的分析—

山 田 晶

一六

existere の語原と、そこから派生する諸々の意味とに關しては、既に述べられたように、シルソンがその著「有と本質」に於て若干論じて居る⁽¹⁾。然しそれはトマスに於けるこの語の意味の全般を、語原的聯關のもとに探究しようとする現在の我々の意圖にとつては、二様の意味で不十分である。第一にそれはこの語の語原的意味の分析として餘りに簡單すぎる。第二にそれはトマスに於けるこの語の用法に、何ら直接的に言及するところがない。故に我々はこの不十分を補う爲に、まづ第一にこの語の語原より生ずる基本的な意味を、なし得る限り精確に把握しよう。第二に、トマスに於けるこの語の用例を、その基本的意味との關係に於て、なし得る限り統一的に説明しよう〔哲研次號〕。

(1) GILSON, L'être et l'essence. p. 14 ff. 本論文第一章註(三)・哲研四三五號四—五頁。

まづこの語の語原について言うならば、明らかにそれは *ex-* という接頭辭と *sistere* という動詞とから成立して居る。そこで我々は、この語の最も基本的な意味を把握する爲に、まづ第一に *ex-* の意味について、第二に *sistere* の意味について〔第一七章以下〕、第三にこの兩者の合成語としての *ex-sistere* の意味について〔第二章〕考察する。

第一に、*ex.* の意味について注意すべきは次の二點である。

(一) 動詞の接頭語としての *ex.* には種々の意味があるが、そのうち *sistere* につくところの *ex.* は、或もの「から」*sistere* するという、起原を示して居ることは明である。同様の *ex.* の例を他に若干もとめるならば、「一から出て行く」(*ex-ire*)「一から去る」(*ex-cedere*)「一から推し出す」(*ex-pellere*)「一から足を外す」(*ex-pedire*)等。これらの動詞と同じく、*ex-sistere* とは、「一から *sistere* する」すなわち *sistere* することが「そこから」おこなわれるそのもとの關係を示して居る。

(二) 次に、この「一から」といわれるそのもとなるものが、その「一する」主體によつて他者であること、これはきわめて當然のことであるが注意を要する。さきの例でいえば、たとえば「一から出て行く」とは、より具體的には常に、「或ものが或ものから出て行く」ことであるが、その出て行く「或もの」と、或ものからといわれるその「或もの」とは別のものでなければならぬ。従つて、「出て行く」とは常に、「或ものが他の或ものから出て行く」ことであり、「出て行く」という行爲は、その行爲の主體と、彼がそこから出て行くもとなる他者との間に成立する。同じことは起原表示的 *ex.* を附加されたすべての他の動詞についていわれ得る。尤もその他者は、必ずしも常に文面に表現されるとは限らない。これらの動詞が單獨に用いられる場合は、それが「どこから」或は「何から」するのかが明瞭でなく、或は問題でなく、従つて話者によつてすら意識されて居ない場合もある。然しそのような場合であつても、「出て行く」「推し出す」等といわれる場合、「そこから」これらの行爲がおこなわれるそのもとなるものの存在は、何らかの意味で他者として前提されて居なければならぬ。同じことが *ex-sistere* についてもいわれ得る。*ex-sistere* とは具體的には常に、「或ものが他の或ものから *sistere* する」ことであり、この或他のものは、たゞい表面にあらわれずとも、しかもなお何らかの意味で前提されねばならぬ。而してこの他者が、いかなる意味で、またいかなるものとして前提されたり想定されたりして居るかに應じて、*ex-sistere* の意味にも様々なニュアンスが生じてくるので

ある。

一十

次に *sistere* の意味について考察しよう。この語は *stare* という動詞と同根であり、意味も殆んど共通する。故に *stare* との比較に於て論じよう。まづ兩語の意味を、一般の辭典について比較考察し、次に特にトマスの用例について比較し、最後にその比較から *sistere* に固有の意味を結論することにす。

辭典によれば、*stare* の原意は「立つ」である。すなわち「坐する」「横たわる」「歩く」などに對立する意味に於て「立つ」ことを意味する。尤も「立つ」ということを少しく詳細に考察すると、二つの意味に區分される。一つは「立ち上る」動作を示すものであり、一つは「立つて居る」持続的狀態を示すものである。而して *stare* は前者よりむしろ後者を示す。「立ち上る」動作を示す爲には *surgere, se resurgere, oriri* などという動詞の方が用いられ、*stare* はむしろ「立つて居る」狀態を示すのである。こゝから「立ちどまつて居る」「靜止して居る」「更にかゝる狀態に於て「持續して居る」「不動である」「堅固である」、更にすゝんで「忍耐して居る」などという意味が派生する。これに對して *sistere* の方は、語原的にいうと、語根の *sta-* が加重 (*reduplicate*) され強められた形である。*stare* がもつばら上述の如き自動詞として用いられるに對して、*sistere* には「立ちどまつて居る」という自動詞の意味の外に、「立たせる」という他動詞の意味があり、この意味の方がむしろこの語にとつて固有的である。他動詞としてそれは或ものを「立たせる」、或場所を立たせて「置く」、配置する、また動いて居るものを立たせる、すなわち「止める」「阻止する」。また *stare* の狀態表示の意味に呼應して、立つて居るといふ狀態にさせて置く、すなわち「立たせて置く」「とゞめて置く」「持久させる」「忍耐させる」などの意味になる。自動詞としては、上述のすべての意味がそのまま自動詞的に轉ずる。すなわち「立つて居る」、或位置狀態などに「置かれて居る」、或狀態に於て

「靜止して居る」「持久して居る」等。要するに、*sistere* は自動詞としては、*stare* と同義語であるといふことができる。⁽¹⁾ 以上が、一般のラテン辭典より知られる *stare* と *sistere* との意味、及びその異同關係である。

(一) 以下、主として次の二辭典を参照する。LEWIS and SHORT, A Latin Dictionary, Oxford, 1951. *sistere* (p. 1711-2), *stare* (p. 1762-3). 及び QUICHERAT et DAVELUY, Dictionnaire Latin-français, Paris, 1916. *sistere* (p. 1278), *stare* (p. 1307-9).

(二) *sistere* は自動詞と他動詞との二つの大きな意味に區分し、自動詞としてのそれを *stare* と等置する。Used in two general senses, I. to cause to stand, place = colloco, pono; II, to stand, be placed = sto (p. 1762) キムトモもまたこれに準ずる。

次にトマスに於ける兩語の用法はどうか。デフェラリは⁽²⁾ トマスに於ける *stare* の意味として次の九つをあげる。まづ文字通りの意味で、(一)「歩いて居る」「坐つて居る」「横たわつて居る」などに對立するところの「立つて居る」。(二)不動に立つて居る。以下比喩的意味で (三)靜止して居る、(四)固執する、持續する、(五)眞として妥當する、(六)或分類のうちに置かれる、(七)兩立する、共存する、(八)時についで靜止する (九)の代りに立つ、代理する。一(四)以下はやゝ特殊な意味であるが、共通する基本的意味は簡單である。すなわち「立つて居る」「持續して居る」「トマまつて居る」等。これはさきに一般の辭典によつて知られたところと何らことならない。次に *sistere* の意味についで、デフェラリは次の二つをあげて居る。文字通りの意味で (一)靜止して居る、不動にトマまつて居る (to stand still, stand immovable) (二)休む、トマまつて立つて居る (rest, stop, remain, stand)——その二の説明に於ては、若干の注意を要する。第一に、デフェラリによれば、トマスに於て *sistere* は、さきに一般の辭典によつて知られたような他動詞の意味では用ゐられず、もっぱら自動詞として用ゐられて居る。第二に、この自動詞の意味に於て、*sistere* は *stare* と同義である。すなわち *sistere* の第一の意味は、上記の *stare* の(一)で、また第二の意味は(二)に該當する。従つて兩語の關係は、*stare* の方が *sistere* よりも意味の範圍が廣く、そのうち「立ちとまつて

居る「静止して居る」などの意味に於て stare は *sistere* に置換えられる、ということになる。

(三) DEFERRARI, op. cit. *sistere* (p. 1033), stare (p. 1054-5)。なおシエツの辭典には、この兩語の説明が缺けて居る。

さてこのデフェラリの第一の結論を、我々は肯定する。すなわち、我々の調べた限りに於て、デフェラリのいう如く、トマスのうちには *sistere* の他動詞的用法はなく、常に自動詞として用いられて居るようである。然し第二の結論に關しては、我々は若干の異義をいだからには居られない。すなわちさきに見た一般辭典も、デフェラリのトマス辭典も、*sistere* は自動詞としては stare と同義語の如く解して居るが、我々の理解するところによれば、この兩語は自動詞としても、それほど單純に同義語としてあつかうことはできないように思われる。stare の他の諸々の意味はしばらく考察外として、今はたゞその「立ちどまつて居る」の意味だけに限定して考えて見ても、それでもなお兩語は同義語とはいえないように思われる。勿論兩語とも譯すれば「立ちどまつて居る」(to remain standing)であり、譯語の上では一致するが、その「立どまつて居る」の意味に或相違が認められる。それはさういふニュアンスの相違であるかも知れぬが、*sistere* 及びその派生語としての *ex-sistere* の意味を精確に把握する爲には見逃し得ないものである。我々は以下にその相違を、直接にトマスの用例にあつて検討しよう。まづはじめに、トマスの著作かの stare の用法を抽出し、その意味を吟味する〔第一八章〕。次に *sistere* の用例について同じことを行う〔第一九章〕。第三に兩者を比較し、そこから *sistere* の固有な意味をひき出すことにする〔第二〇章以下〕。

一八

第一に stare の意味を、トマスの用例に従つて考察しよう。以下の例はすべてデフェラリによつて、トマスの神學大全から引用されたものである。

(a) 同書第二部の二、一八三論題一項に於て、トマスは status 「身分」の概念を、その語原 stare との關聯に

聖トマスに於ける esse と existere について (承前)

於て説明して居る。只今の我々の探究にとつて status は問題でないが、この項ではそれとの關係に於て stare の概念が明確に限定されて居るから、この語の意味に關する限りに於て、この項の所説を聞くことにする。異論一に曰く「status は stare からいわれる。ところで或ものが stare して居るといわれるのは、眞直ぐであるからである」云々。すなわちこの語はその概念内容のうちに、眞直性 (rectitudo) を含んで居る。更に異論二に曰く、「status とする名稱は不動性を含む。たとえばコリント前書に『汝ら stabiles であれ』といわれる如く」云々。stabiles は stare から派生する形容詞でその意味は「恒常不動的」である。故に stare はその概念内容のうちに不動性 (immobilitas) を含んで居る。また異論三に曰く、「status なる名稱は、何らかの高さに關するものと思われる。なぜなら人は、高方へ起てられて居ることから、stare するといわれる故に」。すなわちこの語の概念内容のうちに、高方への起立性 (erectio in altum) が含まれて居る。さて本論に於て、トマスは status との關係に於て stare の意味を説明して曰く、「頭が上方を志向し、足が地上に落着き、その間の肢體がそれぞれ相應の秩序に配置されて居るのが人間自然の姿である。かゝる姿勢をとる爲には、人間は横になつたり、坐つたり、臥せたりして居てはならず、直立して居なければならぬ。なおまた人間は、動くことなく休らつて居る場合のみ stare して居るといわれる」云々。すなわちこゝでは、stare の概念内容として、(一)坐る、横たわる、臥る、などに對して直立して居ること、(二)運動に對して不動であること、が指摘されて居る。而して stare の概念が完成する爲には、このいづれの要因だけでも不完全であつて、兩者相補しなければならぬ。故に異論解答一に曰く、「人は、たゞいかに眞直であらうとも、休止して居ないならば stare して居るといわれぬ」。同異論解答二に曰く、「不動というだけでは status に不十分である。なぜなら坐したり横たわつたりして居る者でも、休んで居るといわれるが、stare とはいわれぬからである」(1)。以上を要約して次のようにいうことができる。—stare とは直立してしかもその状態に於て動かすに於てあることである。

(1) II-II, q. 183, a. 1. ob. 1. Status enim a stando dicitur. Sed stare dicitur aliquis ratione rectitudinis... ob. 2.

Nomen status videtur importare immobilitatem, secundum illud 1 ad Cor. XV. 58: "Stabiles estote et immobiles."... ob. 3. Nomen status videtur ad quandam altitudinem pertinere, nam ex hoc aliquis stat quod in altum erigitur... c. Est enim naturale homini ut caput eius in superiore tendat, et pedes in terra firmentur, et cetera membra media convenienti ordine disponantur; quod quidem non accidit si homo iaceat vel sedeat vel accumbat, sed solum quando erectus stat. Nec rursus stare dicitur si moveat, sed quando quiescit... ad I. Nec etiam homines stare dicuntur, quantumcumque sint recti, nisi quiescant... ad 2. immobilitas non sufficit ad rationem status. Nam etiam sedens vel iacens quiescit, qui tamen non dicitur stare.

さて *stare* の特殊の用法は、この語の意味要因としての直立性と不動性とが、それぞれ獨自の方向に發展したものと解することができる。然しつづれの場合にも、「立ち上る」動作ではなく、「立つて居る」状態を示すという、この語の根本的性格は失われて居ない。以下にその數例を概観する。

(b) 第一部三論題一項に、イザヤ書第三章一三節の「主は裁きの爲に立ち給う」という句を説明して、「神が立つ者といわれるのは、逆うすべての者を平げる強さの故である」といわれて居る。このように「立つ」はその恒常不動性から強さを象徴するに到る。

(c) 同第一八論題一項異論解答三に於て、たえず流れて居る水が「生ける水」(aqueae vivae)といわれるに對して、貯水池の如く停滞して居る水が *aqueae stantes* といわれて居る。この場合の *stare* は、もはや起立性の意味を含まず、もつぱら靜止の状態を示して居る。

(d) 時の今が「流れる今」(nunc fluens)といわれるに對して、永遠の今は *nunc stans* といわれる。時は今の連続である。時は運動の數であり、運動のもとには運動と時との基礎がなければならぬ。時の基礎はすべての時にわたつて不變不動であるが、時の今はたえず流れて行く。今であることに變りないが、この今はもはやかの今ではない。これに對して永遠には運動も變化もない。たゞ永遠に靜止する一つの今あるのみである。かゝる今が *nunc stans*

といわれる。別に今が「立つて居る」わけではない。故にこゝでも stare はもつぱら靜止不動性の意味に用いられて居る。^(四)

(e) stare は或場合には、論旨が通る、妥當する、の意味に用いられる。たとえば、「これは二つの理由で stare できなく^(五)」と云へば、この論旨は二つの理由で立ち通すことができなく、すなわち妥當しなりの意味である。また「一のかわりに立つ」の意味になることもある。たとえば、「この名辭は實體としても關係としても stare する^(六)」といへば、實體の意味にも關係の意味にも代用されることである。これらの場合には、この語のうちには比喩的意味での起立性が含まれて居る。然しなれどもやはり「立ち上る」動作ではなく、「立つて居る」持續性を含意して居る。故に我々は以上の考察よりして、stare とは何ものかが不動的、持續的に立つて居るといふ状態を示す動詞である、と結論することができるとおもふ。

(11) I. q. 3, a. 1, ad 4. et stans propter suam fortitudinem ad debellandum omne quod adversatur.

(12) I. q. 18, a. 1, ad 3. aquae vivae dicuntur, quae habent continuum fluxum; aquae enim stantes, quae non continuantur ad principium continue fluens, dicuntur mortuae, ut aquae cisternarum et lacunarum.

(13) nunc stans なる表現はボエリウス De Trin. cap. 4. (PL. 64. 1253) nunc fluens facit tempus, nunc stans facit aeternitatem. の語句の語源を I. q. 10, a. 2, ad 1. に於て説明して居る。

(14) I. q. 47, a. 1. Sed hoc non potest stare propter duo.

(15) I. q. 30, a. 3, ad 1. Unde potest stare in divinis et pro substantia et pro relatione.

一九

第二に sistere の意味を、同じくテオフィラリによつて引用された神學大全に於けるトマスの用例に従つて考察する。(ただし最後の用例 (f) だけは別である)。あらかじめ結論をいへば、トマスの用例によつて知られる限り、

sistere は、(文字通りにせよ、比喩的にせよ) いづれかの方向を「つき進んで行く」ことに對して反對に、或位置に「おみとままつて居る」ことを意味する。以下この結論を例證しよう。

(a) 第二部の一、二論題八項異論解答一に於て、人間の至福は何らかの仕方て天使に接觸することにあり、という異論を駁して曰く、「なるほど人間のうち最上位の者は、或類似性によつて最下位の天使に觸れる。然し人間はそれをいわば究局目的として、そこに *sistere* することなく、あらゆる善の完全普遍な源泉たる神を目指して進んで行く」すなわち、至福を得る爲には、天使との接觸という境地に *sistere* することなく、神直觀にまで進まねばならぬ。この場合の *sistere* が「立ちどまる」を意味することは明であるにしても、それは「坐して居る」とか「横たわつて居る」とかに對立する意味での「立ちどまる」ではなく、また單に「立ちどまつて居る」靜止状態を示して居るのでもなく、神にまで「つき進む」(*procedere*) に對立して、その地位に「立ちどまつて居る」ことを示して居る。

(b) 第二部の一、八論題三項異論解答三に、目的に向う意志の動きと、目的に對する手段的なものに向う意志の動きとは同じものである、と主張する説を駁して曰く、「自然の動きが時々中間的なものに *sistere* して終局にまで及ばないように、時々人は目的に對する手段的なことがらだけを行つて、目的の獲得にまで到らぬことがある」云々。こゝでは、終局にまで及ぶ (*pertingere*) 自然の動きに對して、中途半端にとどまる自然の動きにいつて *sistere* としわかれて居る。

(c) 第二部の一、三二論題五項に、感覺と知性との認識對象に對する關係を比較して曰く、「感覺は事物の外的附帯性のもとに *sistere* するが、知性は事物の本質にまで透入する」⁽³¹⁾。こゝでは本質に透入する (*penetrare*) 知性に對して、外的附帯性の認識のほとりに立ちどまつて居る感覺認識が *sistere* としわれる。

(d) 第二部の二、二六論題一三項に、現世に於けると天國に於けると人間の意志の、神に對するあり方を比較して曰く、「現世では我々は、よりよき徳と報いとを求め、功徳をつみながらより大きな報いに値すべく進んで行くこ

とができる。然し天國に於てはもはやかゝることはなく、各自の意志は神に定められた限度のもとに *sistere* するであろう。^(四)すなわち天國では人間の意志は、各自神によつて定められた限度のもとに安んじ、従つて現世に於けるような意志の、よりよき徳を向つての向上の動きはとゞまるのである。かゝるとゞまり方を *sistere* が示す。

(e) 第二部の二、一三論題六項に、剛毅の行爲は、攻撃よりむしろ危難のうちにも忍耐することにある旨を説くて曰く、「それ故剛毅の主要なる行爲は、攻撃することよりむしろ、危険のうちにも不動に *sistere* すること存す^(五)」。危険のうちで屈し (*cedere*) 或は離れ (*discedere*) 或は逃避する (*fugere*) などに對して、あくまでその地位に「とゞまらる」ことが *sistere* である。

(f) コリント前書註解第七章に、パウロの婚姻に關する勸告を解説して曰く、「婚姻の行爲が「子孫の爲や夫婦相互の務めの爲ではなく」、單なる慾情に驅られて行われる場合は罪となる。たゞしそれが一人の妻に満足して、婚姻の制限内に *sistere* する場合は小罪である。然らずして慾情がその制限をこえる場合は大罪である」。こゝで慾情が、婚姻のわくを踏み外す場合 (*cum concupiscentia fertur extra limites matrimonii*) に對して、そのわく内に「とゞまらる」場合について *sistere* とゞまれて居る。

これら六つの例よりして、*sistere* が「立ちとゞまる」の意味であるにしても、單に靜止的起立状態ではなくて、とゞれかの方向へ、進んだり運ばれたり向つたりすることに對して反對に、或地位に「とゞみとゞまらる」という強い意味を含んで居ることは明である。

- (一) I-II, q. 2, a. 8, ad I. Superius hominis attingit quidem infimum angelicæ naturæ per quandam similitudinem; non tamen ibi sistit sicut in ultimo fine, sed procedit usque ad ipsum universalem fontem boni,……
- (二) I-II, q. 8, a. 3, ad 3. sicut motus naturalis interdum sistit in medio, et non pertingit ad terminum;……
- (三) I-II, q. 31, a. 5. sensus sistit circa exteriora accidentia rei; intellectus penetrat usque ad rei essentiam;……
- (四) II-II, q. 26, a. 13, sed tunc voluntas uniuscuiusque infra hoc sistet quod est determinatum divinitus.

- (五) II-II, q. 123, a. 6. Et ideo principalior actus fortitudinis est sustinere, idest immobiliter sistere in periculis, quam aggredi.
- (六) In I Ad Cor. c. 7, n. 329. Cum quis ad actum matrimonialem ex concupiscentia excitatur, quae tamen infra limites matrimonii sistit, ut schlicet cum sola uxore sit contentus.

二〇

以上に於て stare と sistere との意味を、トマスの用例によつて考察したから、次に兩者を比較し、注意すべき點を指摘しよう。

第一に、兩語とも單で「立つ」ことではなく「立ちどまつて居る」とうう持続性を含意することに於て共通であり、この意味で兩者は同義語であるといふこともできよう。

(一) この限りに於て、ルイス・キシユラー・デフェラリの辭典の所説はみな正當である。本論文第一七節参照。

第二に、stare は「坐つて居る」「横たわつて居る」「動つて居る」などに對して、「立つて居る」靜止的狀態を示す。ところが sistere は「進んで行く」に對して或位置に「立ちどまつて居る」ことを示す。

(二) stare に對立する概念は「坐して居る」「横たわつて居る」「動いて居る」などであることは、本論文第一八章(a)例によつて明である。

sistere に對立する概念を第一九章の例によつて示すと、(a)進む (procedere) (b)及ぶ (pertingere) (c)透入する (penetrare) (d)前進する (proficere) (e)屈する (cedere) 逃げる (fugere) 等 (f)制限外に出る (feri extra limitem)。これらの動詞はすべて、何らかの意味で或方面へ「進む」ことを意味する。

第三に、stare は「立ちどまつて居る」狀態を示す靜止的概念である。ところが sistere の方は「立ちどまつて居る」「立ちどまつて居る」はたるきを示し、勿論その意味のうちに靜止性を含むにしても、それは單なる靜止ではなく

何らかの動きに對して對抗的に「とどまつて居る」こと、すなわち動に對する靜、或は動に對する緊張をうちに含んだ靜、を示して居る。日本語で、單なる「立ちどまつて居る」ではなく「ふみどまつて居る」という表現がそれにあたる。

(三) (1) stare は靜中の靜であり、sistere は動をうちに含む靜である。たとえば、神が stare する者である、といわれる例(第一章(b))と、危険に於て sistere するといわれる例(第一章(c))を比較して見よう。後の例に於ては、おそいから危険に對して「ふみどまつて對抗する」という動に對する緊張が sistere のうちに含まれている。これに反し、神がさかろう著に對して stans であるといわれる時、それは反對者に對する對抗性よりむしろ神自身の絶對不動性を示して居る。stare の靜止性は aquae stantes (第一章(c))例、nunc stans (同章(d))例などの表現のうちによくあらわれて居る。

(2) 兩者の意味の相違は、兩語を入れて見るとよく分る。たとえば、天國に於ては人間の意志は、神によつて定められた限度に sistere する(第一章(d))例、これを stare にすると、人間の意志のはたらきがそこで靜止してしまふことになる。ところが sistere は、意志がその限度をふみこえて行かないことを意味するだけであつて、そこではたらきをやめてしまふことを意味しない。故にその限度内に於て、意志はいぜん神を志向するはたらきをつゞけて居るのである。慾情が婚姻の制限内に sistere するという場合(同章(f))例についても同じことがいわれる。これを stare にすると、慾情がその制限内で靜まることを示すことになるが、この場合はそうでなく、sistere といへば、慾情はたゞ「はめを外さない」だけのことであつて、婚姻のわく内ではなお盛に活動して居ることが示される。

第四に、stare によつては「立ちどまつて居る」靜止的狀態が示され、従つてその主語が何であるかは時によると漠然として居る。かゝる性格の徹底したものが、stare の合成語に於て認められるいわゆる非人稱的用法であらう。ところが sistere の方は「立ちどまつて居る」状態よりもむしろ「立ちどまつて居る」そのはたらきを示すから、そのはたらきの主體としての主語の方に力點がおかれる。故に sistere とその合成語は、漠然たる非人稱的用法に用ゐられることなく、常に限定された主語をとる。而して最も限定されたものは個體である。故に sistere の主語は多くの場合個體的なるもの、ないし個別的限定的に考へられたものである。また事物に限定性を與えるものは形相である。

故に *sistere* の主語になるものは形相的なるものである。(四)

(四) (1) *stare* の主語は漠然たることあり。たとえば *aqueae stantes* (第一八章(c))例一のかわりに *aqueae sistentes* とするものは不適切である。なぜならば *stare* は静止の状態を示すから *aqueae stantes* といわれる場合、この *stantes* は水の停滞状態を示すのである。ところが *sistere* するといふと、状態よりむしろ「立どまじて居る」というはたらき及びはたらきの主體としての個的に限定されたものが強調されてくる。ところが水は漠然たる物質量であつて個體性をもたぬ。故に日本語でも「水がどっこおじて居る」とはいわれるが「水が立つて居る」とはいわれぬように、*stare* といわれるが *sistere* といわれぬのである。 *nunc stans* (同章(d))例二の「今」も同じことがいわれる。もし *stare* のかわりに *sistere* を用ひて *nunc sistens* とすると、「今」ははたらきの主體性が賦與され、「今」といふものが「ふみとままじて居る」とことになる。然るに「今」はそのようなはたらきの主體ではなく、*stans* は永遠の今の静止性を形容する形容詞にすぎぬのである。

(2) *stare* の状態表示性が徹底すると、特定の主語をとらぬ非人稱の用法になる。これは *stare* の合成語にあらわれる。 *con-stare* > *con-stat*: 「一と一ととは確實である。」 I q. 14, a. 12, *haec autem constat esse infinita*. それらのものが無限であることは確實である。 *ob-stare* > *ob-stat* 邪魔になる。 *non ob-stat*: 「一と一ととは互に互に」 *re-stare* > *re-stat*: 「一と一ととは残りて居る。」 I q. 15, *Procl. Post considerationem de scientia Dei, restat considerare de ideis*, 神の知りて居るの考察の後、*re-stare* して考察することおのこつて居る。

(3) *sistere* の主語は明確に限定されることは *sistere* の合成語に於て明瞭にあらわれてくる。たとえば上例の *con-, ob-, re-* など *stare* のかわりに *sistere* をひける *re-, con-sistere* 存立する、*ob-sistere* 反対する、*re-sistere* 反抗する、などの意味となり、これらの動詞は状態よりむしろはたらきの方をあらわすから、はたらきの主體としての明確な限定された主語をとらねばならぬ。 I-II q. 55, a. 2, ad 3, *beatitudo... in operatione consistit*. 至福ははたらきのうちに成立し。 III q. 42, a. 2, ad 2, *Pharissae, qui semper doctrinae Christi obsistebant*. パリサイ人たちは、いつもキリストの教に反対して居た。 I-II, q. 9, a. 5, ad 3, *passiones, quibus soli sapientes resistent*. たゞ賢人のみが情念にさからう。

(4) *stare* の静止の状態的性格と *sistere* の主體的活動的性格とが、最も明瞭なコントラストをなしてあらわれるのは *sub-stare* の *sub-sistere* との二動詞に於てである。前者は實體のあり方を示す。實體とは變動常なき現象的附帯性の「*sub-*」(sub-)「立つて居る」(*-stare*)、附帯性の變化をなさないがそれ自身は恒常的自己同一性を保つものとして、*sub-stans* とかわれる。これに對して、*sub-sistere* といわれる時、それは何か他のものの「もと」に立つことではなく、*esse* と *existere* の二つ (承前)

むしろ他者に於てではなく、自己自身の有に「もとづいて」自己自身の存在の「もと」に自立するもの (sub esse suo sistens) を示す。「subsistere」については本論文第七・八章 哲研四三六號三二頁以下参照。質料的合成實體 (substantia composita) は、諸附帯有の「もとに立つ」スブスターチアであるとともに、またそれ自體に於て自存するスブシメンズであるが、それが諸附帯有をもちそのもとに sub-stare するものとなるのは、それが質料を有するからであり、逆にそれが自己自身に於て存立するものとしてスブシメンズといわれるのは、そのものの何たるかを規定する形相をもつからである。故に形相がスブシメンズの原理であるに對し、質料はスブスターレの原理であるといわれる。I. q. 29, a. 2, ad 5. quia materia est principium substandi, et forma est principium substandi. スブシメンズとスブスターレとの關係については、第一部二九論題二項参照。

第五に stare は何らかの動に對抗する靜ではなくて、いわば絶対の靜である。故に stare して居るものは、過去にも未來にも動かず、永遠に靜止して居るとも解され得る。ところが sistere の方は、動に對する靜、ないし動に對する緊張をうちにはらんだ靜である。故に、今 sistere して居るものは、これまでづつと動いてきて、今やつとそこに「立ちどまつて居る」のであるとも、また今は「立ちどまつて居る」が、やがて動き出すであろうものとも考えられる。前の場合にはそれは過去に動の經歷を負い、後の場合にはそれは未來に動の可能性をほらむ。^(五)

(五) (1) 動の經歷をになう、sistere について。たとえば「天使との接觸に sistere せず神にまですくむ」(一九章(三)例)とか、「中間的なものに sistere し終局に及ばぬ」(同章(七)例)とかいう場合の sistere を stare にすると、人間がともかくも天使との接觸の境地にまで上昇してきたこと、自然の意圖がともかくも中間的なものにまで及んだこと、などという sistere に到る前半の運動進行の概念が消失する。

(2) このことは ex-stare と ex-sistere とについていわれて得る。ex-stare とは「一から立つて居る」「一から突出して居る」こと、そこから「あらわれて居る」状態を示す。exstans といへば「突出して居る」「ぬきんできて居る」「すくわれて居る」状態を示す形容詞となる。ところが ex-sistere とらへば或ものが「そこから出てきて今立つて居る」という、その「立つて居る今」に到る動きが含まれて居る。それ故に「一から出てくる」という動きをふくんだ意味が生ずる。

第六に stare は單に「立ちどまつて居る」靜止状態を示すだけであるから、それが「どこに於てか」という位置

ないし場所は必ずしも問題にならない。ところが *sistere* の方は、「立ちどまつて居る」はたらくと、それに關聯して「立ちどまつて居る」主語が強調されるから、従つてまた、その主體が「どこに」立ちどまつて居るか、というその位置なり場所なり範圍なりが、文字通りの意味に於てにせよ比喩的意味に於てにせよ、明確に限定されなければならぬ。

(六) たとえば *Deus stans, nunc stans, aquae stantes* などと云われる場合、この *stare* は、神・水・今などの静止状態を形容するだけのことであつて、それ自身が「どこに於て」*stare* するかといふことは問題にならない。これに對して *sistere* の例を見ると、「天使との接觸という境地に」(第一九章(a)例)、「中間的なものに」(同(b)例)、「外的附帶性のほとり」(同(c)例)、「定められた限度のもとに」(同(d)例)、「危険のうち」(同(e)例)、「婚姻の制限内に」(同(f)例) *sistere* する、というように、その場所・地位・範圍などが明確に限定されて居るのである。

以上我々は、六つの點に於て *stare* と *sistere* との意味の異同を考察した。もとよりこれらの異同は絶對的なものでなく、相互に重なり合ひ、特に *stare* なしその合成語が *sistere* なしその合成語の意味と同義となることなしはしもあるが「たとへば *con-stare* が *con-sistere* と同義に、また *re-stare* が *re-sistere* の意味に用いられることあり」、然し少くともその原意に於て上述の如き異同は、兩語間に明に認められ得ると思う。

二

これまで我々は、*ex-* という接頭辭と、*sistere* という動詞の意味について考察してきたが、次に兩者の合成語としての *ex-sistere* の意味の考察にうつる前に、以上の考察の結論を要約しよう。

(一) *ex-* は「一から」という起原を示す。それが或動詞につくと、「一から出て一する」の意味となるが、この場合「一するもの」すなわち動詞の主語になるものは、「一から」の起原となるものとは異なるものでなければならぬ。故に複合動詞は常に、「或ものか他の或ものから出てきて一する」の意味であり、従つてこの動詞は、出てくるもの

とその起原との二者を前提し、二者間に成立する。

□ *sistere* は「立ちどまつて居る」ことを意味する。ただし「横たわつて居る」「坐つて居る」「動いて居る」などに對立する意味での起立的靜止狀態ではなくて、むしろ「つきすすんで行く」に對して「ふみとどまつて居る」はたらきを示す。従つてそれは、絶對の靜ではなく、動に對する緊張をうちにはらんだ靜を含蓄する。狀態よりはたらしきの方に力點が置かれる結果、立ちどまつて居る「その主體」、及び立ちどまつて居る「その場所」が、明確に限定されなければならぬ。

以上に考察したところから、兩語の複合動詞としての *ex-sistere* がとり得るところの、あらゆる可能的なる意味を、あますことなくあらわに表現すると、次の如くなるであらう。すなわち *ex-sistere* とは、「何かある限定されたものが、何らかの他者から出てきて、一限定されたそこに、立ちどまつて居る」ことである。

尤もこれは、*ex-sistere* という語が、その構成要素たる二語の特質よりして、凡そとり得ると考えられるすべての可能的意味を、書きならべたにすぎないから、この語が現實に使用される場合、いつもこれらすべての意味を有するとは限らない。現實にはかえつて、これら數箇の意味のシラブルのうちの一つ、ないし二つの上にアクセントが置かれて、其他のシラブルの意味は背後に退いて單に餘韻としてひびくか、それとも時には全く消滅してしまつてたゞ或意味のシラブルだけが強調されるのが普通である。そしてそのアクセントの置きどころ、またこれらの意味のシラブルの様々な組合はせの仕方にもとづいて、この一語から、様々な意味の音色がひびき出してくるようであるが、然しもとをたゞせば、それらの意味は、すべてこの一聯の意味系列のいつれかのうちに還元されてしまうのである。かくて我々は、この *ex-sistere* という語の、最も基本的な意味の線を把握したわけであるから、次にはトマスに於けるこの語の用例を廣く考察し、それをこの基本的意味の線に即して、なし得る限り統一的に説明して見よう。(未完)